

M-GTA 研究会 News letter no.20

編集・発行：M-GTA 研究会事務局（立教大学社会学部木下研究室）

メーリングリストのアドレス：grounded@ml.rikkyo.ne.jp

世話人：阿部正子、小倉啓子、木下康仁、小嶋章吾、坂本智代枝、佐川佳南枝、林葉子、福島哲夫、水戸美津子、山崎浩司

2007年 夏合宿の報告

今月号は、7月に1泊2日で山梨県で行われた夏合宿の特集です。合宿に参加されての感想を寄せていただきました。

【日時】 平成19年7月28日・29日

【場所】 山梨県甲斐市竜地17 ホテル神の湯温泉

【出席者(19名)】

・市江和子（日本赤十字豊田看護大学）・大西潤子（武蔵野大学）・大橋達子（富山赤十字病院）・柴田弘子（産業医科大学）・杉田穂子（立教女学院短期大学）・隅谷理子（アドバンテッジ リスクマネジメント）・新鞍真理子（富山大学）・藤野清美（新潟大学）・松繁卓哉（立教大学）・松戸宏予（筑波大学）・三澤久恵（共立女子短期大学）・打本未来（龍谷大学）・得津慎子（関西福祉科学大学）・三徳和子（川崎医療福祉大学）・阿部正子（筑波大学）・小倉啓子（ヤマザキ動物看護短期大学）・木下康仁（立教大学）・坂本智代枝（大正大学）・佐川佳南枝（立教大学）

.....

■今回の夏合宿は、阿部正子さん提供のデータ（2例）を用いて、2グループに分かれて、それぞれ、分析テーマの設定、概念生成、カテゴリー化までの作業を行いました。

「夏合宿でデータを提供して」

（筑波大学大学院人間総合科学研究科 看護学類 阿部正子）

私は去年に引き続き、データを提供させていただきました。インタビューの内容は、体外受精を複数回受療している不妊女性の治療経過について、また治療を継続するきっかけや治療への思いなどについての語りで、1名は40代前半、もう1名は30代前半の既婚女性でした。

私の関心は、「40歳を過ぎて医学的にも妊娠可能性が低くなってきた女性が、不妊治療を止められないのはなぜか」という点でした。去年の分析では、不妊治療を止めていくプロセスとして【軟着陸に向けたレディネスの醸成】というカテゴリーを生成しました。今回はそのカテゴリーに焦点を当てて、どのような動きがあるのか、自分の関心を上手く表せる分析テーマが設定でき

ないものかと話し合う過程で、「妊娠可能性が狭まっていくプロセス」や「現実には直面するプロセス」「軟着陸できるための情報の取捨選択がなされるプロセス」「不妊を受け入れるまでのプロセス」等、沢山の意見が出されました。そうした中で浮かび上がってきたものは、“この女性は不妊治療を受ける人の持つべき規範に則っているのではないか、生物学的限界を迎えるときにも、こうあるべきだといった彼女の中での規範があるのではないか”、ということでした。加えて、この女性が置かれている状況には、不妊治療を“止めるに止められない要因が沢山ある”こと、また“止める理由がない”ことが不妊治療を継続する背景にあるのだということも話されました。このようにグループで話し合う中で、それぞれのアイデアや感想が私にとってとても新鮮であり、自分の関心の狭さに気づくことができました。ここでは、一歩引いてみることの大切さと、それにはグループバイジングが効果的であることを再確認しました。

今回の合宿では2つのグループを編成し、それぞれ異なる分析テーマが設定されました。ひとつは「体外受精を受けている高齢不妊女性の“もう駄目かもしれない”という思いの強まりプロセス」、もうひとつは「不妊治療を受けている女性の治療を降りられないプロセス」でした。私自身では、分析テーマを絞り込むことができず、スーパーバイザーから「“もう駄目かもしれない”という思いの強まりプロセスはどうか」という提案をしてくださった時、データにしっくりくる感じがして、是非これを分析テーマにしたいと半ば強引に決めさせていただきました。ここから11個の概念が生成され、コアになりそうな概念として【限られてくるチャンス】が生成されました。しかし合宿2日目の合同発表時に、「若い人には限られてくるチャンスという限界設定がないからゴールが見えず、治療から降りられないのではないか、現象特性として、若い人には手持ちの札がまだまだたくさんあるというイメージがある」という点を指摘され、今回提示した2つのケースのどれにも当てはまる分析テーマかどうか、確認作業が必要だということに気づきました。また木下先生から「治療を止める方向にいくとき、どのような動きがあるのか」と質問を投げかけられ、そのような動きを明らかに出来るものを分析テーマにする必要があると感じました。今まで逐語録からは「治療を続けるという軌道から降りるに降りられない」というイメージが強く感じられ、「治療を止める方向にいくうごき」に着目していませんでした。合宿の成果を踏まえれば、高齢不妊女性が“もう駄目かもしれない”と思うときに「治療を止める方向にいくうごき」なのかもしれません。不妊治療に携わる医療者の側からは“あの人はモチベーションが下がっている”ということを時々口にしますが、何をその人から感じ取ってそういうのか、私自身でもわかっていませんでした。今回のデータからは【厳しい現実直視】や【最期通告の予感】というカテゴリー、〈やっぱり成果がない〉〈周囲のままならなさ〉という概念等、治療を止めていく方向に関係しそうな概念がいくつか挙げられました。これらは今後のインタビューガイドに反映させていくつもりです。

おわりに、今回の合宿では分析テーマの設定やその後の概念生成過程から、“離陸する”感覚や、概念同士の動きが捉えられる瞬間、現象特性が目の前に立ち現れてくる感じなど、「生みの苦しみ」と同時に「気分の高揚感」を体験することができました。特に、気分の高揚感は質的研究の醍醐味でもあります。それを思い起こさせてくれた合宿の経験は、私にとって何よりのエネ

ルギーとなりました。分析テーマは今後、修正が加わると思いますが、常にどんな動きなのかに注目しながら、研究意義である「不妊治療の終止時期について迷うカップルの心理的準備性の向上」を支援するための理論構築を目指していきたいと思います。最後に、このような機会を与えてくださり、そしてたくさんの示唆を与えてくれた参加者の皆様にお礼を申し上げます。

「M-GTA夏合宿に参加して」

(日本赤十字豊田看護大学 市江和子)

2007年7月28・29日、山梨県甲府市で、「M-GTAによる分析方法の理解を深める」を目的とした夏合宿に参加させていただきました。2日間、参加者が2グループに分かれ、分析テーマを決定し、概念生成、カテゴリー生成を行いました。

提供していただいた事例を読み、まずはデータ収集の大切さを感じました。いかに、対象に近づき、インタビューするか、語ってもらえるかということです。そして、明らかにしたいテーマに対してどれだけ知識をもっているかが問われると痛感しました。実際の概念生成の過程では、語彙をどれだけ知っているか、理解しているかが大切だと思います。グループで話すことによって、いろいろな見方や考え方があり、概念生成におけるディスカッションの必要性を確認できました。それとともに、M-GTAに関する知識をもち、研究に取り組むという基本を再認識させていただきました。

今回、今まで以上に貴重な学習をさせていただきました。この学習をすることで、自分が取り組んでいる研究に、しっかりと向き合いたいという思いを強くもつことができました。事例を提供いただきました阿部先生、開催にご尽力いただきました世話人の皆様、本当にありがとうございます。

「夏の合宿」

(武蔵野大学 大西潤子)

今回はこれまでの知識レベルから実感を得ることができたという意味で、有意義な合宿となりました。事例は不妊治療を継続している方(S殿)のものであったため、その世界を知らない者にとって、深く考えることができるか少し心配でした。しかし専門用語や不妊治療の流れなどが説明され、状況が分かると研究の意義がとても大きなものであることが理解できました。状況が分かった上で、インタビューを読み直すと当事者の心境がよく伝わってきて、当事者は精神的に追いつめられながらも時間に追われつつ治療を続け、さらには他の治療者と競い合っている気持ちにさえなることを知りましてた。そして妊娠競争のスパイラルにはまってしまい抜け出すことのできないS殿が浮かび上がり、「現象特性」の言葉の持つ意味を実感としてとらえることができました。

Bグループでは、当初この事例の分析テーマを「不妊治療継続のプロセス」と、やや客観的な表現にしましたが、分析をしていく上では、「不妊治療をおりられないプロセス」と、いう現象特性を意識した表現にした方が、どこに着眼したらよいのかどのようなことを概念化したらよ

いのか明確になり、分析が進みました。

私が、今回の合宿で得られた実感のもう一つは、つながりを考えながら概念生成をしていくということです。一人で分析をしていると、コーディングが整理作業になってしまいがちですが、グループで討議しながら(定義を確認しながら)概念を生成していったことで、概念同士の関係性を見いだすことができました。合宿では一人の方のデータでしたが、このように関係づけながら分析を進めていくことで、複数のインタビューデータが分析されても概念がバラバラにならず、むしろまとまっていくことが予測できました。今後自分のデータの分析が楽しみになるようなわくわくするような気持ちで、東京へ戻りました。合宿でお世話になった方々、ありがとうございました。

「2007 夏合宿の感想」

(富山大学 新鞍真理子)

山梨県へは田園風景を眺めながら、のんびり電車を乗り継ぎながら向かいました。富山からは、東京へ行くよりも時間がかかったのが驚きました。神の湯温泉は、癒しを感じる人に優しい温泉でした。

研修では、グループで概念生成を行いました。概念生成では、個々の事例のみに特徴的なことではなく、他の事例にも共通するようなネイミングが求められ、他の事例の内容も念頭に置きながら、抽象度を上げる作業が必要でした。

まず、概念のネイミングが難しいと思いました。抽象度を上げる作業は、語られた内容の解釈に関係すると思います。また、解釈の視点や変化の捉え方は、各専門職により異なるため、分析テーマと到達点は同じであっても、専門職種によって重視したい点が異なるのではないかと思います。さらに、抽象度が高くなると、ほとんどの現象の説明ができてしまうので、バイエーションの数は増えますが、概念の広がりが見えにくくなるのではないかと思います。

また、概念成立の条件として、類似の具体例がなく、1事例だけによる具体例の場合は、概念として成立しない可能性が高いことが指摘されています(木下, 2007)。私は、これまで、グラウンデッドセオリーは、1事例の現象でも取り上げる分析方法だと思っていましたが、今回の研修を通して、そうではないことに気づきました。

今回の研修では、分析テーマに合わせて、1事例ずつ丁寧に、概念生成を行います。事例分析ではなく、他の事例にも共通する概念として生成することの重要性を学びました。また、概念名の抽象度が上がると客観的な解釈や分析になるため、体験のリアリティー感が失われていくように感じましたが、リアリティー感は、個々の事例の体験としてではなく、概念間の関係から導くことが大切なのかなと思いました。

「夏合宿の感想」

(立教大学 松繁卓哉)

実践形式でデータを分析する作業を通して実感出来たことが幾つかあり、それがこの合宿にお

ける大きな収穫であったと感じています。第一に、分析を開始する前は茫漠として立ちただかっているように感じた生データが、グループ作業の中から一先ず分析テーマを設定することで、分析者としての自分の‘立ち位置’が得られ、そのことでデータが見え始めてくることの感触が持てたことです。また、抽出された複数の概念の間の関係性を読み取っていく作業においても、内容の是非はともかく「このことは言えそうだ」という点を挙げてみることで、内容の精査を進めていくことが可能になり、理解しようとしているプロセスの構造が次第に把握されていくことのイメージを持つことも出来ました。世話人の皆様、合宿の準備運営・データのご提供、本当に有難うございました。

「2007 M-GTA 研究会夏合宿の感想」

(立教大学 木下康仁)

今回の合宿は、仕事の関係で一日目の夕食からの参加となりました。一日目に分析テーマの設定をていねいに検討されたようで、ワークシートによる概念生成もある程度進んでいましたので、二日目はその続きだけでなく、概念生成をしつつ同時並行で概念の個別比較をしながらカテゴリーを生成する練習をしてもらいました。実は、M-GTA の習得でこの作業が非常に重要なのですが、あまり理解されていないという印象をもっています。オープン化から収束化へと分析を進める上で大事な分岐点で、概念間の関係に何らかのアイデアが着想できるかどうか、そして、それが成り立つかどうかをデータに対して確かめていく（理論的サンプリング）作業が、分析を躍動的な経験にしていきます。2 グループともそれぞれにこの部分を理解できたのではないのでしょうか。

宿は甲府市のはずれでしょうか、すぐ近くまで住宅地が開けたところにありました。快適なところでした。うれしい驚きというのは時々あるもので、ここは自前の源泉をもち、かけ流しの泉質のすばらしい温泉がありました。数種類の風呂がありましたが、全部は試しきれませんでした。温泉に興味のある人にはおすすめです。

今回の幹事とデータ提供をしてくださった阿部さん、そして、グループのスーパーバイザーを担当された皆さん、ご苦労様でした。忙しいなか準備も含め、ありがとうございました。参加された皆さん、お疲れ様でした。

「夏合宿に参加して」

(大正大学 坂本智代枝)

夏合宿は、昨年から2回目の参加になった。昨年はどのようにデータから概念生成するのかということを重点的に学んだ。今年は、さらに発展的に概念生成から概念間に関係性へと学ぶことができた。そこから、重要になってくるのがデータに忠実に概念化することと、分析テーマをデータから明確にしていく作業である。データを忠実に読むということは、あたりまえのこととして捉えがちであるが、実は初歩的でありながら、もっとも重要な作業であることを改めて実感した。

合宿で得られることは、研究に向けて切磋琢磨している方々に多く出会う機会でもあり、ゆっ

くりと気持ちの良いお湯につかり、参加者の方々から学ぶよい機会である。私にとって無理をしても合宿に参加する理由は、研究に向かう姿勢やエネルギーを貯えるよい機会を与えられるからである。

「合宿感想」

(ヤマザキ動物看護短期大学 小倉啓子)

定例の研究会と合宿との違いとして、まず、長い時間をかけて1つのデータに皆で取り組めることがありました。対象者2人のどちらのデータを選択するかの討論、分析テーマの設定と最初の概念生成までの苦心、オープン・コーディングがやっと軌道に乗った感じ、概念間の関連やプロセスへの注意がおろそかになっても気がつかず概念生成に集中してしまったこと、プロセスとしてどのようにまとまるかに懸命に意識を戻して、一応の結果をまとめて発表をしてみたことなど軌道修正をしながらの分析過程を体験をしました。

大きな会議室で、ホワイトボードを境にして2グループに分かれて行ないましたので、他のグループの討論の様子も半分見聞き出来て良い刺激になったと思います。2つのグループは別々のデータで異なった分析テーマを設定したので、生成された概念もプロセスも当然異なりました。しかし、結果の発表を聞いていると、説得力のある概念は初めて聞いても納得させる力があるものだと感じました。

1つのデータを同じメンバーでじっくり取り組んだので、曖昧になっていたことがわかったり、分析についての誤解に気づいたりした case もありました。私は、プロセスの視点を忘れてしまう悪い癖に気づき愕然としましたし、司会者として皆さんにご迷惑を掛けてしまったと思います。

今後は、参加者は遠路はるばる忙しいなかを集まるので、個人的な要望も出来るだけ取り入れた合宿にしていけたらと思います。データ提供と素晴らしい温泉宿の紹介などの労を取って下さった阿部先生、全体的統括をして下さった佐川さん、ご指導下さいました木下先生、参加者の皆様、充実した2日間を本当に有難うございました。

「夏合宿感想」

(立教大学 佐川佳南枝)

合宿は総勢19人、去年と比べて小規模、9人の2グループで行いました。その分、濃いディスカッションができたのではないのでしょうか。私自身は世話人として、グループをリードしなければならない立場でした。1日目はデータを読み、分析テーマの設定と現象特性をまず考えました。その後、概念生成に入りましたが、メンバーからさまざまな解釈が出てくるものの、その事例の特殊性に拘泥してしまい、なかなか分析テーマ、現象特性に沿った分析が軌道に載らず、未消化のまま1日目が終わってしまい、いささか焦りを覚えました(その割によく飲みましたけど)。2日目は木下先生のサジェスションにより、概念間のまとめ、関係性を考えることを中心に行っていました。午前中、集中して作業を進め、ようやくなんとか軌道に乗ってきたという実感を持つことができ、ホッと胸をなでおろしました。私にとっては分析のナビゲートの難し

さを実感した合宿でした。グループワークのナビゲート役としては今後の課題の多い合宿でしたが、温泉好きの私としては、お湯がすばらしく、夜も朝も堪能しました。風呂上りのビールもワインもおいしかったです。あとは富士山が見えれば、いうことはなかったんですけど。また個人的にも訪れたいところとなりました。

【編集後記】

今月号は、夏合宿の感想の特集号でしたが、いかがでしたでしょうか。参加されなかった方にもヒントになることがあったのではないかと思います。分析のトレーニングだけでなく、合宿や公開研究会は、日常から離れてメンバー間の懇親を深める機会でもあります。みなさんの感想にも触れられていたように、とてもよい温泉を探して下さり、宿の手配、データの提供をしてくださった阿部正子さん、ほんとうにありがとうございました。

(佐川佳南枝)